

応用物理学会員のワーク・ライフバランスの現状 —第 3 回大規模アンケート：科学技術系専門職の男女共同参画実態調査より—

Actual condition of work-life balance of JSPS members

~ from the 3rd large-scale survey on gender equality in scientific and technological professions ~

中部大学超伝導センター °筑本知子

CASER, Chubu Univ. °Noriko Chikumoto

E-mail: oubutsu@jsap.or.jp

2001 年に応用物理学会で実施された応用物理学会「男女共同参画委員会アンケート」調査 [1] では注目されるべき結果として、「若い世代では男女差が小さく、年齢とともに差が大きくなる傾向にあること、研究機関別役職年齢推移は、企業では 50 歳以降、大学では 40 歳代で男女差が開き、国立研ではサンプル数が少ないが男女差は小さいこと、家事の負担は圧倒的に女性にかかっていること、女性の子どもの数が男性と比較して少なく平均 1.4 人（男性 2.1 人）」などが報告されました。その後、対象を広げ、39 学協会の参加で行った男女共同参画学協会連絡会による「第一回男女共同参画学協会連絡会アンケート調査」[2] においても、分野を問わず「昇進・研究費の明らかな格差、女性研究者は子どもをもちにくい、育休取得が昇進に影響、女性の大きな家事・育児負担、性別役割意識の男女差」など大きな男女格差があることが明らかになっています。

それから、10 年余が経過した今、このような格差は小さくなったのでしょうか？

上記調査を受けて、この 10 年の間に、大学・公的研究機関を対象に、日本学術振興会「特別研究員 RPD 制度」の発足、文部科学省・科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成」（初年度は 10 大学が採択）、文部科学省・科学技術振興調整費「研究者・技術者と女子中高生の交流機会のサポート」（女子高校生・夏の学校への支援）が行われ、また企業でも女性育成に力を入れるなど、様々な取り組みが行われてきました。

本報告では、応用物理学会員のワーク・ライフバランスの現状はこの 10 年でどう変化したのかについて、先にあげた第一回調査 2007 年および 2012 年に同じく男女共同参画学協会連絡会によって実施された第二回および第三回大規模アンケート調査 [3] [4] の応用物理学会会員についての解析結果をもとに報告します。

[1] <https://www.jsap.or.jp/activities/talent/enquete/index.html>

[2] 「21 世紀の多様化する科学技術研究者の理想像 -男女共同参画推進のために-」男女共同参画学協会連絡会（2004）<http://annex.jsap.or.jp/renrakukai/2003enquete/PDF/2004ReportWeb.pdf>

[3] 「科学技術系専門職における男女共同参画実態の大規模調査」男女共同参画学協会連絡会（2008）http://annex.jsap.or.jp/renrakukai/2007enquete/h19enquete_report_v2.pdf

[4] 第三回 科学技術系専門職の男女共同参画実態調査」男女共同参画学協会連絡会（2013）
http://annex.jsap.or.jp/renrakukai/doc_pdf/2013/3rd_enq/3rd_enq_report130918.pdf